

## 第六章 アジアという〈他者〉 『満韓ところへ』

漱石テキストが、慣れない他者に警戒的で排他的であることはすでに「西洋」や「田舎」に関する言説を見るだけですでに明らかだが、「アジア」に関してはどうだったろうか。漱石のテキストには「朝鮮」や「満州」への言及が多く見られるが、その背景となったのが満州と韓国を旅行した経験にあったことはすでによく知られている。そして『満韓ところへ』（以下、『満韓』とする）は、明治四十二年の中国韓国旅行の体験を書き残した漱石唯一の紀行文だが、最後まで書かれずに新聞連載の途中で中止になっただけでなく、そこに漱石の「植民主義」（中野重治「漱石以来」、昭和三十三年三月五日付『アカハタ』）が現れているとして早くから批判の対象となった。しかしその一方でそのような早くからの批判に対しての反論も少なくなく、漱石とアジア、漱石と植民地主義の問題に関する理解はいまだに錯綜しているようだ。

### 一、二つの中国像

最初に、漱石における中国像がどのようなものだったのかを確認しておこう。

漱石は日記や書簡にも韓国や中国に関する言及を多く残しているが、その中でも、次の文章は漱石の中国観の肯定的な一面を示すものとして頻繁に取り上げられてきたものである。

日本人ヲ観テ支那人ト云ハレルト厭ガルハ如何、支那人ハ日本人ヨリモ遙カニ名誉アル国民ナリ、只不幸ニシテ目下不振ノ有様ニ沈淪セルナリ、心アル人ハ日本人ト呼バル、ヨリモ支那人ト云ハル、ヨリ名誉トスベキナリ、仮令然ラザルニモセヨ日本ハ今迄ドレ程支那ノ厄介ニナリシカ、少シハ考ヘテ見ルガヨカラウ（略）（明治三十四年三月十五日付日記）

明治二十八年の日清戦争における勝利は、近代日本の力をはじめて世界に誇示できた事として多くの日本人に民族的誇りをもたらしたが、その誇りの気持ちは、同時に明治初期以降、文明開化への動きと共に強まったアジア蔑視の傾向に拍車を掛けてもいた。「日本人ヲ観テ支那人ト言ハレルト厭ガル」というのはそのような時代の雰囲気伝えるものと言えるだろう。そして、漱石がそのような一般的空気を批判していることは、評価されるべ

きである。

とはいえ、ここでの漱石の発言はもう少しの検討が必要であるように思われる。

ここで漱石の言う「厄介ニナリシ」と言うのは、中国が日本に伝えた文化上のことと考えていいはずだ。漱石自身、自ら作品を作るほどに漢詩や南画など中国の文化を愛していたことは周知の通りである。漢詩が漱石の自己表現の手段となっていたということは、漢詩が漱石にとってすでに、もとは他国のものでありながら、異質なものではなくなっていたことを示す。おそらく、文化としての中国が、漱石にとって「支那人トイハルルヲ名誉トスベキ」というほどに価値を帯びるものでありえたのはそのためである。すなわち、<文化>としての中国は漱石にとってははじめから他者ではなかったのであり、むしろたやすく自己同一化できるものであっただけに、漱石にとっては中国への軽蔑は受け入れがたいものだったのである。

小説テキストにおける<文化>としての中国(「支那」)は、『草枕』における「漢詩」をはじめ、「絨毯」(『草枕』)、「詩集」(『それから』)、「御寺」(『彼岸過迄』)などの対象を通して語られるのだが、その場合、中国はほとんどにおいて憧憬と親近感をもって語られる。ところが、<昔> = <文化>とは隔たっているかのように見える<現在>の<人間>に関する言及となると、例えば「孔子ノ仮面ハ盗跖ガ盗ンデ行ツタ。支那人ハコレデアル」(「断片」明治三十九年)というように、必ずしも肯定的に描かれるわけではない。中国人に関わる日常生活上の不愉快な経験も(注1) 否定的な中国観形成を手伝ったようである。

それはテキストの中でも同様に、<現実>の<人間>に関する描写はほとんど否定的である。たとえば先程の「詩集」や「御寺」への共感とほとんど平行して次のような言葉が散見されるのである。

晩食の時、門野が、

「先生、今日は一日御勉強ですな、どうです、些と御散歩になりませんか。今日は寅毘沙ですぜ。演芸館で支那人の留学生が芝居を演つています。どんな事を演る積ですか、行つて御覧なすつたら何うです。支那人てえ奴は、臆面がないから、何でも遣る気だから呑気なもんだ。……」と一人で喋舌つた。(『それから』八の六)

中で最も敬太郎を驚ろかしたのは、長春とかにある博打場の光景で、是は嘗て馬賊の

大将をしたといふ去る日本人の経営に係るものだが、其所へ行つてみると、何百人と集まる汚ない支那人が、折り詰めのようにぎつしり詰まつて、血眼になりながら、一種の臭氣を吐き合つてゐるのださうである。(『彼岸過迄』、「風呂の後」十二)

Hさんは銘仙の着物に白い縮緬の兵児帯をぐるへ巻き付けた俣、椅子の上に胡坐をかいて、「珍しいお客さんを連れて来たね」と三沢に云つた。丸い顔と丸い五分刈の頭を有つた彼は、支那人のやうにでくへ肥つて居た。(『行人』、「塵勞」十四)

このような、「臆面がない」「でくへ肥つている」「汚い」「臭氣を吐き合つている」というような表現が日本における「中国」の表象を作っていなかったとはいえない。「支那人ト云ハレルト厭ガル」状況もまた、そのような表象が作り出したものと見るべきである。それはむろんやがて、輕蔑と差別にとむすびついていくだろう。他民族の表象がいかに恣意的なものであるかに関してはここでは触れないが(注2) とりあえず、漱石テキストの中に、相反する二つの中国像が共存していること、そして、漱石がそのような矛盾に気づいてなかったことだけを確認しておこう。

## 二、南満州鉄道株式会社

船が飯田河岸の様な石垣の横へびたりと着くんだから海とは思へない。河岸の上には人が沢山並んでゐる。けれども其大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う沢山塊ると、更に不体裁である。余は甲板の上に立つて、遠くから此群集を見下しながら、腹の中で、へえー、此奴は妙な所へ着いたねと思つた。

(四)

漱石が大連に着いて最初に見たものは「クーリー」の群集だった。問題は、彼らの「汚らし」さに閉口し、記したことではない。目の前にいる「汚」い他者たちを前にしての最初の感想が、「此奴は妙な所へ着いた」というものだったこそが問題なのである。たとえば先に見た『彼岸過迄』における「臭氣」を放つ中国人の群集への言及はこの時の光景に基づいてのものと考えられるが、漱石における「汚」い他者に対する認識は、彼らのいる場所を「妙な所」と規定することで、自己のいるべき場所と区別しようとする欲望を見せ

つけるものである。

当時満州には山東省などからの出稼ぎ労働者が数多く集まっており、その数は百万を超え(明治四十四年統計) 漱石が着いた大連だけでも三万人以上の労働者が働いていたという。時期的には少し下るが、その大連の労働者についての当時の言及を見てみよう。

大連の苦力は埠頭の荷役作業上に需要するものが主たるもので、日々八千内外の苦力を使用しつつある。次は市内の交通運搬業に使役するものである。目下市中に存在する人力車の数は一千輛、荷車は三千五百輛、荷馬車、客馬車合わせて一千七百輛、総計六千二百二百輛の多数に上り、之が操縦者は少なくとも五千人以上である。その次は砂河口の満鉄工場の四千、油房の約三千人そのほか各種請負業者の下に使はる者が二千内外、各種工場に隷属する日雇労働者の数も二千人を下らぬ状態である。経営中の大連埠頭にして完成せば年々一千満噸以上の貨物を吞吐する予定なれば埠頭のみにも少なくとも、一萬以上の苦力を要するのである。此外各種企業の勃興による需要の増加は言ふを待たぬ。(満州産業界研究会編『満州産業界より見たる支那の苦力』、大正8)

漱石が見た「沢山」の苦力とは、ほかならない日本との「貨物」運搬のための「大連埠頭」の工事や市街の輸送・移動や様々な工場で働く人々だった。彼らは、そのほとんどが極貧農家の出身で、「破れ衣服を身に纏ひ、陋屋に群居し部屋の内に棚を釣りにて六畳一間に十人内外を収容し、夏は路傍または人家の軒下に仮寝するもの大部を占むる」(前掲書)と似たような状況下にいた。彼らの身なりが「汚い」のは当然だったのである。

大連の中国人労働者たちを管理していたのは、「満鉄」、漱石の友人である中村是公が総裁の任を勤めていた「南満州鉄道株式会社」であった。日本の満州進出は、日露戦争後、ロシアが敷設した東清鉄道の中、ハルビン以南の鉄道を日露講和条約によって譲り受けての鉄道管理から始まる。日本はロシアが明治三十六年に完成した東清鉄道を、日本の機関車を使えるように改築するなど、すでに韓国内に敷設してあった京釜線と併せてたくみに利用して日露戦争を勝利に導き、「鉄道利権の確保」は「日本政府の戦後経営における重要な力点」となるようになっていた。そして明治三十九年に「南満州鉄道株式会社」が設立されるようになったのである(以上、原田勝正『満鉄』、岩波書店、1981)

満鉄の満州経営の「唯一の要訣は、陽に鉄道経営の仮面を装い、陰に百般施設を執行する」(『後藤新平 第二巻』、ただし引用は原田前掲書『満鉄』による)にあった。そして、

大連に支社をおいて（後には東京の方が支社となり、大連の方が本社となる）様々な事業に着手することになるのだが、大正二年に満鉄が出した『大連』という観光案内冊子によると、大連は、「荒地」にすぎなかったのをロシアが都市計画にもとづいて施設をつくっていた途中に日本が「継承」したところだった。

その満鉄が中国人を大々的に雇用するようになったのは、資金不足を打開するためにとった合理化対策として日本人従業員を大量に整理した明治四十一年以来のことだった。彼らは「福昌華工株式会社」の請負によって雇用されたが、賃金は「日本人労働者の賃金百に対する満州人労働者の賃金比率」は二五・七にしかない額（『満州の苦力』、南満州鉄道株式会社）だった。そのため、中国人を雇用したことによって生じた満鉄の特別利潤の総額は莫大な額だったとされている（安藤彦太郎『満鉄—日本帝国主義と中国』、お茶の水書房、昭和40年）。満鉄は「勤勉にして強壯而も低廉なる労力を提供する」中国人労働者を「満州開発の原動力」（『満鉄沿線事情』、南満州鉄道株式会社、大正7）として使い、「満州における文化及び資源開発の大なる使命」を帯びた「日本民族の進路の開拓者」（前掲書『大連』）として、「日本の中国進出の拠点となっ」（安藤前掲書）ていたのである。

この労働者たちは「病気の外は決して休むことなし」とされ、「美点」は「壮健にして無病なこと」にあり、「内地労働者」を使うと「すくなくとも一、二割は病気または事故のために休むのが普通」なのに、「苦力にはかかる恐れが至つて少ない」とされる（前掲『満州産業界からみたる支那の苦力』）更に、この調査は彼らが「殆ど入浴しない」とし、「毎朝に於ける洗面は全く省くものが多く」、「此点に於いては人というよりか寧ろ猫にも劣る」として、漱石と同様「汚らしさ」への嫌悪を示している。漱石の感覚は「江戸」的な知識人のもの（注3）というより、「日本人」としての普遍的なものだったというべきであろう。

さらにこの調査は「従順な性質」「体格が立派で耐久力に富んでいる」点などを「美点」としてあげ、その点で日本人を雇用するより望ましいとしながら「要するに、苦力の体力の優秀なるを利用して土木や荷役や豆糟や煉瓦製造などの如き簡易工業に使用し、出来高払にして受け請負はしむるのが一番有利の苦力使用法である」と続けている。

漱石は豆工場を見学し、油が淀んでいる鉄の桶を「恐ろしく」思い、「落ちて死ぬ事」がないかと聞いている（一七）。案内は「滅多に落ちる様な事は」ないと答えているが、実際には労働中の死傷者は少なくなかった（安藤前掲書）。満鉄が行なっていた多くの事業の中でも豆と炭坑はその中心となるもので、全満州の三分の一に達する豆工場が大連に密集

し、豆工業は大連第一の工業となっていた。その豆糟の最大の消費国が日本だったことから「満州視察者の足を止めて見学すべきところ」と、先の『大連』の案内冊子は伝えている。漱石が豆工場を見学したのもそのような文脈でのことだったのである。これは「油房」と呼ばれていたが、「油房内で油にまみれた裸形の苦力の豆糟などを扱うところなどは珍しい作業ぶり」だったとされる。漱石が「大人しくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、ただ見物するのでさへ心持ちが好い」(十七)とし、「韓楚軍譚」の「豪傑」を思い出したりしているのも、中国人労働者たちを「見られる」観光商品とした満鉄の意図に沿った見方だったのである。

### 三、風景としての中国

このように漱石は中国の労働者たちを雇用者の眼でしか眺めていない。差別意識があきらかな言辞を頻繁に書き残すことになるのは必然だったというべきだろう。

漱石は人力車夫に対して「汗臭い浅黄色の股引が背広の裾に触るので気味が悪い事がある」(三十二)とし、「油に埃の食ひ込んだ弁髪」(四十五)を厭う。これらの言葉を「感覚を通しておさえた事実」(米田利昭「漱石の満韓旅行」、『文学』昭和47・9)を述べたにすぎないと強調した論者もいたが、その「感覚」へのこだわりが他者の排除へとつながるものであることは言うまでもない。実際漱石は、やがて「苦力」に限らず「中国」に対して「如何にも汚ない国民である」(四十七)とし、「人間に至つては固より無神経で、古来から此泥水を飲んで、悠然と子を生んで今日迄栄えてある」(四十)とまで言うようになる。中国人たちが汚い水を飲んでも平気だと言いつつそのことに蔑視と驚きを現すのは満鉄の調査も同様で、漱石もまた、貧困と不潔に対する差別意識を超えることはなかったのである。

それなのに無人の境を行くが如くに飛ばして見せる。我々の様な平和を喜ぶ輩は此車に乗つてゐるのが既に苦痛である。御者は勿論チャンへで、油に埃の食ひ込んだ弁髪を振り立てながら、時々満州の声を出す。(四十五)

人力は日本人の発明したものであるけれども、引子が支那人もしくは朝鮮人である間は決して油断しては不可ない。彼等はどうせ他の拵へたものだと云ふ料見で、毫も人力

に対して尊敬を払はない引き方をする。(四十六)

漱石は人力車にゆられながら、引き方における日本との違いに苛立っている。漱石自身、自分のことを「神経質で臆病な性分」(四十九)と自嘲的に言っているのだが、そのような「性分」が寛容の余地を奪ったことは仕方がないとしても、日本人が作った「人力車」への「尊敬」を要求するというような優越意識が、拒否と偏見の基盤になっていたことは確認しておくべきであろう。言うまでもなく、韓国や中国人の引き方が日本と違って乱暴だったのは、「平和を喜ばないからでも」、「どうせ他の拵へたものだと云ふ料見」があるからでもなく、扱い方の違い 国民性(ここではとりあえずそうしておく)の違いゆえのものでしかないのだ。

漱石はここで「チャンへ」という言葉を使っているが、日記のなかには「露助」という言葉がみられる(注4)。互いに嫌っている異民族の間にはこの種の言葉は必ずあるというが(注5)、「露助」も「チャンへ」も、ともに日清日露戦争における勝利がその背景になっていたことはいうまでもない。漱石は差別語を多用しており(注6)、差別語の使用をそのまま差別意識に結びつけるのは控えたいが、漱石の場合、力をつけつつあった自国への自負心に基づいた優越意識が、差別語を使うことに対する抵抗を感じさせなかったものと見るべきであろう。

しかし、『満韓』に関しては、「自分と相手とを共におとしめ」(米田利昭、前掲論文)ようとする意識を読み取る意見や、漱石の文体を「現実を滑稽化して描き出す文体」(「伊豆利彦「漱石とアジア 『満韓ところへ』その他」、『漱石と天皇制』、有精堂、1989・9)とするような、漱石と帝国主義のかかわりを認めまいとする評言はながらく続いてきた。しかし、それは<人格者漱石><反帝国主義者漱石>のイメージに囚われたための解釈とするべきであろう。漱石に、たとえば怪我をした人をそのままにしておく中国人たちに対して「残酷な支那人」(四十五)としたり、イギリス人に対して「天気を氣にかけない禽獣」(『倫敦消息』)とするような、他民族にたいする短絡的な判断傾向があることさえもあまり取りあげられるこなかったのも、すべてはそこに原因があるといえるだろう。

風呂から出て砂の中に立ちながら、河の上流を見渡すと、河がぐるりと緩く折れ曲つてゐる。其向ふ側に五六本の大きな柳が見へる。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭水を涉つて来た。距離が遠いので小さく動いてゐるが、色丈は判然分る。皆茶褐色を

して柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりも猶小さかつた。凡てが世間で云ふ南画と称するものに髣髴として面白かつた。中にも高い柳が細い葉を悉く枝に収めて、静まり返つてゐる所は、全く支那めいてゐた。(三十三)

漱石は現実の「支那」を目の前にしながら、「南画」を思い浮かべている。それは、漱石の中にすでにイメージとしての「中国」が出来あがっていたということを表すが、このように中国が既に慣れ親しんだ〈風景〉〈文化〉として現れる時、漱石の文章は安心感と好意に満ちるものになることに注意しよう。むしろ「南画」としての「牛追」もまた、おそらくは「汚」い中国人であったはずだが、漱石が満州において見たかったのは、あくまでも〈風景〉としての中国だったことが改めて確認できるのである。

#### 四、「文明」の容認

『虞美人草』に、西洋に行く準備をしなければならなくなった宗近が「支那や朝鮮なら、故の通りの五分刈りで、このだぶへの洋服を着て出掛けるですがね」(十六)と話す場面がある。この言葉は「支那」や「朝鮮」が、日本にとってすでに他国ではなくなっていたことを窺わせるものだが、『満韓』の中にも「満韓」が外国ではなく外地に過ぎなかったことを表す「内地」という言葉がくりかえされる。漱石自身は洋服を新調して出掛けていったが(注7) 当時の「満韓」は「日本」の〈外地〉にふさわしくなるべく、もう一つの日本の姿に変化しつつあった。

韓国の場合、明治三十七年にすでに日本による顧問政治がはじまり、財政や外交に関する自律権が失われ、これによる通貨整理の過程で、三十八年三月には日本の第一銀行の支店となった韓国銀行で発行した日本の貨幣を使えるまでになっていた。金融面における支配が、実質的な支配であることはいうまでもなく、日韓併合以前にすでに日本による支配は始まっていたのである。漱石はおみやげをたくさん買って来たが(夏目鏡子『漱石の思ひ出』、改造社、1928・11)、日本のお金を使えたはずである。そして、町の書店には「ほととぎす」や「中央公論」が入っており、「日本人が多くて内地に居ると同様」と感じるほどに多くの日本人が既に移住していた。漱石が行った時期から五年ほど経った時期に刊行された『朝鮮鉄道駅勢一班』(朝鮮総督府鉄道局、1914)によると、当時のソウルの日本人は、韓国人が二十五万人弱であるのに対して、五万六千人にのぼっている。



確かに当時の新聞が伝えるように「韓半島我が勢力圏に入る」(明治三十八年十一月二十三日付「官報」)といった事態は存在したのだし、それを漱石は実感することができただろう。

そして漱石は、満鉄の一人の社員についてつぎのように述べる。

満鉄から任用の話があつたとき、子供が病気で危篤であつたのに、相生さんはさつさと大連へ来て仕舞つた。来て一週間すると子供が死んだと云ふ便りがあつた。相生さんは内地を去る時、既に此悲報を手にする覚悟をしてゐたのださうだ。(二十)

「相生さん」とは、満鉄に勤めるようになってから中村是公の勧めで中国人労働者を管理していた人物で、漱石の遺墨の所蔵者としても知られている人物である。今では、労働者に対する管理のやり方がひどかったことから、植民地主義者の典型として批判されてもいる人でもある。それはともかくとして、上記の叙述によると、彼は家庭よりも仕事、個人よりも国家を優先させることを当然としていた典型的な明治人でもあったようである。

上記の文ではそのようなことが美しい逸話として紹介されていて、漱石が「満鉄」の仕事ひいては「国家」のなすことに懐疑を感じることはなかったことを表している。ほかに漱石は、「戦後経営」のため満州へ始めてやってきた人々について「死物狂で、天候と欠乏と不便に対して戦後の戦争を開始した」(十六)と、称揚しているのである。

このような見方の総集編として『満韓視察』(注8)をとりあげることができるだろう。

視察所ぢやない、空に遊んできたのだから話す程の事ありません行つた先は哈爾濱まで、す此度旅行して感心したのは日本人は進取の氣象に富んで貧乏世帯ながら分相応に何処までも発展して行くと云ふ事実と之に伴ふ経営者の氣概であります満韓を遊歴して見ると成程日本人は頼母じき国民だと云ふ氣が起ります(注9)従つて何処に行つても肩身が広くて心持が好いです之に反して支那人や朝鮮人を見ると甚だ氣の毒になる、幸ひにして日本人に生まれました故幸福だと思ひました、モ一つ感心した事は彼の地で経営に従事して居るものは皆熱心に其の管理の事業に従事して自己の挙げた成功に対して皆満足の状態をもつて説明して呉れる事でありませぬ幾多の人に逢つて色々の話をして見ましたが悲觀したり絶望して居る者は一人もない様でした(中略)其の成功に対する報酬が内地の倍以上に高価にあるから徒に郷土病に羅るもの、外は男子会心の事業として又安んじて其の職を尽くさざるを得ないのだらうと思ひませぬ(後略)

強調は原文)

漱石にとって満州進出は「進取の氣象」の現れであり、それを示したのは「経営者の氣概」である。漱石が満州で確認したのは「日本人は頼もしき国民」だということであり、そのような「日本人に生まれ」て「幸福」だという実感だった。「満韓」における男たちの活動は「男子会心の事業」であり、まぎれもない「発展」の象徴である。「内地の倍以上に高価にある」「報酬」とは実に「生活人」(駒尺喜美「漱石の朝鮮観」、『歴史公論』昭和55・4)的な感覚による発言だろうが、そのことに無批判的な漱石を、反帝国主義とすることはできない。満鉄の事業を「民族的大使命」(松岡洋右「序」、菊池寛著『満鉄外史』、満鉄会、昭和17)としていた見方と漱石の認識は基本的には同一のものと見るべきである。

しかし、だからといって漱石が帝国主義自体を称揚したと言いたいのではない。漱石はおそらくその背後における他者たちの苦しみなど深く考えないまま、日本が力をつけて行くことをまず望ましいと考えたのであろう。

次々と日本の町が出来ていくような韓国の変わり様に対して「純粹の日本の開化なり」(明治四十二年九月三十日付日記)していたのは、漱石が日本の事業をほかならない「開化」と見ていたことを示す。「満韓」に出来た日本の町は、漱石にとっては日本が自らの意志にもとづいてやった、自発的「開化」だったのである。そしてそれまでの日本の開化を「外発的」ものと考えてはがゆい思いをしていた漱石にとっては、それは当然ながら歓迎すべきことだったのである。

漱石の「満韓」旅行は、韓国の釜山から中国までつながっていた鉄道を利用したものであったが、先にみたように鉄道は帝国主義の尖兵としての役割を果たさせるため作られたものであった(注10)。しかし、かつて『草枕』において示していたような汽車批判は満韓ではなされない。むしろ、漱石は「東洋第一の煙突をもつた電氣工場」の「凄まじい音」と「凄まじい運動」を、「文学者の頭以上に崇高なもの」(以上、十五)だと記すのみである。また、「始めて日本人の車に乗る。車も清潔にてクツシヨンあり毛の厚い膝掛あり」(明治四十二年九月二十八日付日記)と、その心地よさにこだわるのだが、清潔や心地よさへの工夫が、他でもない「文明」のもう一つの顔であることは言うまでもない。漱石の「文明」批判は、日本がその主体である場合は猶予されるのである(注11)。満韓における「文明」のありようは、漱石にとってあくまでも「comfortable」(明治四十二年九月二十八日

付日記)なものであった。

漱石は「汽車」で満韓を縦断しながら、その「汽車」に代表される「開化」=「文明」を批判しなかったのだが、それは、満韓における日本の活動が、自国の「内発的」要求からの意義ある「開化」に見えたからにほかならず、それはその「文明」の恩恵を受けていない者たちに対する、言葉の「暴力」(注12)を産んでもいたなのである。

## 五 漱石の植民地観

彼は毎日見る下宿の下女の顔に飽き果てた。毎日食ふ下宿の菜にも飽き果てた。責めてこの単調を破るために、満鉄の方が出来るとか、朝鮮の方が纏るとかすれば、まだ衣食の途以外に、幾分かの刺激が得られるのだけれども、両方共二三日前に当分望みがないと判然して見ると益眼前の平凡が自分の無能力と密接な関係でもあるかの様に思はれて、ひどくぼんやりして仕舞つた。(『彼岸過迄』)

満州ことに大連ははなはだ好いところです。貴方の様な有為の青年が発展すべきところは当分無いでしょう。思ひ切つて是非いらつしやいませんか。(同)

当然というべきだろうが、満韓旅行以降書かれた作品において「朝鮮」や「満鉄」は、あくまでも日常生活の「単調を破る」刺激源でしかない。植民地は、宗主国の「有為の青年」の「発展」を保証し得る<約束の地>であることこそが満韓で漱石が確認したことだったと言うべきであろう。「刺激」に富む冒険の場所であると同時にそこはまた、「機会があつたら、此所へ来て一夏気楽に暮したい」(二十二)と言っているように、漱石にとっては休養地でもあるべき場所だった。

しかし、満州は別として、当時の新聞はこの時期の韓国で抗日運動が起こっていることをたびたび報道していた。すでに明治四十年には軍隊を解体された韓国兵が「ついに爆発して我が兵と衝突」といった記事が東京朝日新聞(八月三日)に載っており、漱石の目にもふれているはずである。漱石が旅行からもどったあと伊藤博文の暗殺事件が起ったが、それを契機に「果然韓国に暴徒蜂起す」(明治四十二年十月三十一日)というような事態も起こっていた。『朝鮮暴徒討伐誌』(朝鮮駐在指令部刊)によると「排日を鼓吹して施政を妨害するもの後を全く絶つに至らず」といった状況だったのである。漱石が韓国を歩いて

いた明治四十二年にも毎月のように抗日の動きは激しく、捕らえられて自殺したり、殺害されたりした人は少なくなかった。四十一年の六月には「親日派韓人一千名殺害さる」などの記事が「時事新報」に見え、日本による植民地化をめぐる状況が順調でないことに気づくことのできる情報は流されていたのだが、漱石はそのような動きに特別な関心は見せていない。朝鮮は「一夏気楽」にすごせるような場所ではなかったことがすくなくとも『満韓』においては表されていない。

小生近頃の出来事の内尤もありがたきは王妃の殺害と濱茂の拘引に御座候（明治二十八年十一月十三日付正岡子規宛書簡、求龍堂刊『夏目漱石遺墨集』第五巻所収）

「王妃の殺害」とは、いわゆる京城事変における日本人による韓国の王妃殺害のことであって、この発言は、二十代の漱石がエスノセントリズム的考え方をしていたことを示していよう。もっとも、当時の報道は、韓国王妃に対する憎悪を掻き立てるような報道をしていて、若い漱石もまたそれに乗せられていたのだろう。この書簡は、昭和四十一年版の全集には収録されていなかったものである（注13）。

韓国皇帝の譲位に対しても漱石は「日本から云へばこんな目出度事はない。もつと強硬にやつてもいゝ所」（明治四十年七月十九日付小宮豊隆宛書簡）と言っている。確かに、一方では「しかし、朝鮮の王様は非常に気の毒なものだ。世の中に朝鮮の王様に同情してゐるものは僕ばかりだらう。あれで朝鮮が滅亡する端緒を開いては祖先へ申訳がない。実に気の毒だ。」（同前）というような同情的な発言を残しているが、そのような同情はむしろ当時において少なからず見られるものだった。「気の毒」という表現は、先に触れた『満韓視察』に見られた「幸福」な「日本人」に対して「支那人」や「朝鮮人」に対して「気の毒」としていたのと同類のものと見るべきである。そして、優越意識に支えられた「同情」や哀れみが真の＜批判＞とは程遠いものであることは言うまでもない。

確かに漱石は、韓国の観光団に向けられた日本の新聞の軽蔑の調子に対して「自分等が外国人に軽侮せらるゝ事は柵へ上げると見えたり」（明治四十二年四月二十六日付日記）と述べるような批判もしているのだが、漱石の日本批判は前章で見たように、「外国人」「西洋」との力関係においてその内実が十分でないというような、どちらかというともむしろナショナリズム的衷情からのものと見るべきなのである。

又、御弟子さんや新聞社の人や其他いろいろの人が来て、その人達と一緒に外へ出ることの外には殆ど外へ出ず、賑やかな所へ行くでもなし、名所見物をするでもなし一日内へ引き籠つておられたこともありました。(鈴木穆「朝鮮旅行の頃」、昭和三年版「漱石全集 月報九」)

この証言は、漱石が、西洋滞在の時と同様、韓国を見ることに積極的ではなかったことを教えてくれる。むろん一通りの見物 視察はしていることを日記によって知ることが出来るが、漱石に他者への関心が大きかったとすることはできないだろう。「ある種の他者体験が媒介になって初めて自己体験も可能になる」(広松渡「鼎談 言語・表情・他者」、『現代思想』平成元年三月)という言葉を参考にするなら、漱石の満韓旅行が帝国主義日本国の人以上のものとならなかったのはむしろ当然だったのである。

先に揚げた『満州産業界より見たる支那の苦力』という本には『満韓』の一部が転載されている。この本には、「苦力」という言葉の語源をはじめ苦力に関するさまざまな調査結果が収められているが、先にふれた相生由太郎の序が冒頭に配置されており、続く「第三編 苦力余談」の中に「文士の見たる苦力」と題する章がある。そこには徳富蘇峯の『七十八遊記』が収められ、次に入っているのが漱石の『満韓』の冒頭、そして豆工場見学のところである。このような資料に使われていたのが漱石の本意であったかどうかは確認できないが、『満韓』は少なくとも当時の人々にとってはあくまでも植民地視察記以上のものではなかったのであり、そのことは満鉄の総裁である友人の招待に応じた時にすでにまぬがれないことだったのであろう。従って、漱石が「帝国主義的な植民地支配の本質について、深く考えをめぐらさずにはいられず」、「過剰に中国人侮蔑の軽薄な言辞を生んだ」(伊豆利彦、前掲論文)と言えるような根拠など、『満韓』には存在すべくもなかったのである。

隈本氏傍にありて苦笑して度し難いなと。好い加減に御免蒙つて山縣を引つ張つて宿へ帰る。久しぶりだから話さうと云ふ。隈本後れて至る。岡崎遠光亦至る。遠光と五十雄と冗談をいふ。矢野の曰く従来此所で成功したものは匱造白銅、泥棒と〇〇なり。其例を挙ぐ。期限をきつて金を貸して期日に返済すると留守を使つて明日抵当をとり上げる。千圓の手付けに千圓の証文を書かして訴訟する。自分の宅地を無闇に増して縄張をひろくする。

余韓人は気の毒なりといふ。山縣賛成。隈本も賛成。やがて帰る。(明治四十二年十

月五日付日記)

植民地における日本人たちの不合理な行為について聞き、漱石が「気の毒」と言ったこの文章もよく引かれるものだが、続けて「苦しめて金持ちとなりたると同時に朝鮮人からだまされたものあり」とも記していることは注意されてこなかった。漱石は、植民地人と宗主国人の根本的な不平等な力関係など知らず、そこで表象されるのは、「内地」では考えられない、興味津々な事件が日常茶飯事のように繰り広げられる、異様な場として植民地である。

現実への目が捨象された<風景>としての中国への傾斜は朝鮮においても同様で、朝鮮に関して残されているのは風景描写であり、次のような回顧的感じ方である。

一度朝鮮に入れば人悉く白し。  
なつかしき土の臭いや松の秋。

高麗人の冠を吹くや秋の風  
秋の山に逢ふや白衣の人にのみ。

高麗百済新羅の国を我行けば  
我行く方に秋の白雲

肌寒くなりまさる夜の窓の外に  
雨をあざむくぼぶらあの音

草繁き宮居の跡を一人行けば  
磯を吹く高麗の秋風

高麗や新羅などの<昔>に思いを馳せていられる限り、韓国の現実を見る必要はない。だからこそ、漱石の満韓旅行は「至る所に知人があったので道中ははなはだ好都合にアリストラチックに威張つて通つてきた」(十一月二十八日寺田寅彦宛書簡)というようなものになりえたのである(注14)。「帰るとすぐに伊藤公が死ぬ。伊藤は僕と同じ船で大連

へ行って、僕と同じ所をあるいて蛤爾賓で殺された。僕が降りて踏んだプラトホームだから意外の偶然である。僕も狙撃でもせ(ら)れば、胃病でうんへいふよりも花が咲いたかも知れない」というような認識は、『門』における、伊藤狙撃事件をめぐる会話と大した差はない。漱石は、何故殺されたかよりは、「同じ所」の「偶然」のほうに興味を持っているようであり、「僕が狙撃されれば」云々のところはその政治的深刻さに気づいてない証拠と言うほかない。

他者が他者であること、すなわち、レヴィナスのいうところの他者の「絶対的他者性」(『他者のユマニスム』、書肆風の薔薇、平1・4)を見ることこそ、<関係>成立を可能にするはずだが、漱石には「異人としての他者が見えてこな」(大嶋仁「『異人』の論理と『他者』の論理」、平川祐弘・鶴田欣也編『内なる壁』(TBSブリタニカ、1990・7)所収)かった。すでに早くに大岡昇平は「漱石研究が漱石に保護的」(『小説家夏目漱石』、筑摩書房、昭和63・5)と指摘していたが、その指摘は改めて真摯に受け止められねばならないだろう。

#### 注

- 1) 明治四十二年七月三日と四日の日記には、中国人が漱石のところに突然やってきて当惑した事が記され、「怪しからぬ奴」「言語道断」とある。
- 2) 朴裕河『誰が日本を歪めるのか』(社会評論、2000・8、ソウル)は、現代韓国における「日本」の表象とそれに基づく反日ナショナリズムを分析している。
- 3) 「江戸以来の町人の感覚」、吉田熙生「満韓ところべ」(『近代日本文学における中国像』、有斐閣、1975・10)
- 4) 明治四十二年九月二十二日の日記には「露助の油揚げのパンを食ふ」「露助が赤い衣服を着て御者になる」とある。
- 5) クリステヴァーは『外国人 我らの内なるもの』(法政大学出版局、平成2・10)のなかで、人間がその歴史のなかで異質性への不安をどのような形で排除或は同化させようとしてきたかについて考察を行っている。
- 6) 石井和夫は「貴種流離譚のパロディー『坊つちやん』」(『敍説』第二集、平成2・3)の中で「差別する漱石」の存在を指摘している。
- 7) 明治四十二年八月十八日付日記には「満州行きの為め洋服屋を呼んで背広を作る」とある。

8)「満韓視察」はこの論の執筆の際は全集に収録されておらず、明治四十二年十月十八日付「大阪朝日新聞」に載っていたのを、本論を書いた1992年にはじめて引用した。1994年から刊行された新しい全集には「東京朝日新聞」に載っていたとされる「満韓の文明」が収録されており、ほぼ似通った内容のものとなっている。

9)昭和四十一年版の『漱石全集』には明治四十二年の「朝日新聞社内鳥居赫雄」宛書簡として「此度旅行して」から「と云ふ氣が起」までが収録されていた。

10)『朝鮮鉄道史』(朝鮮總督府鉄道局刊、大正4)には、韓国における鉄道が経済的利益物から戦争遂行のためものとなっていく過程が語られている。

11)米田氏は漱石の文明観に言及し、漱石が「開化論を優位」におきながらも「開化そのものに疑問を持っている」としている。しかし、一・二・三章で述べたように、漱石の疑問はあくまでも「外発的」「開化」に向けられたものであって、「開化そのもの」に対するものではない。

12)高橋哲哉氏は「歴史・理性・暴力」(『差別』、岩波書店、平成2・7)の中で、フッサールやデ・マルティーノにひそむ排除意識を指摘し、それは「理性の暴力」だったとしている。

13)この書簡は、昭和四十年版には収録されていなかったのを、やはり私が「遺墨集」からその存在に気づいてとりあげたものである。1993年に刊行されはじめた新しい全集には収録されるようになったが、先の「満韓視察」が収録されてなかったことと合わせて、その遺漏の経緯が明らかにされる必要があるかもしれない。

14)小宮豊隆は『満韓』に対して、「(無二の親友である)中村是公から勧められ、さういう中村是公が向こうで待っているのだから、主観的に言って漱石の『満韓ところへ』が中村是公に始まって中村是公に終わるのも、極めて当然」としながら「満州で会った自分の旧友の噂で持ち切った紀行文」(「漱石の芸術」昭和17・11、岩波書店)と規定している。